

集約する心 ―家持の歌の場―

浅野則子

はじめに

藤原広嗣の乱の後、聖武天皇は、都を移り続けるが、彼の周りでは光明子・仲麻呂と橘諸兄との対立は皇位継承者として阿倍内親王か安積皇子かという点を中心として激しくなり、安積皇子を次代の天皇にとする橘諸兄のグループには藤原八束などとともに家持も入っていた。さらに望みを託した安積皇子なきあととは、反藤原としての諸兄と、光明子と結びついて勢力を増す仲麻呂との対立は深まっていくのである。こうした時代は史書とはまた別に家持によって万葉集に残された歌からもみることができよう。それは、具体的に家持が関わった歌の場というかたちで今、私たちがとらえることができるものである。こうした歌の場について、すでに日本史の研究からは、そこでの政治的な要素が論じられている。宴の場を構成しているメンバーと史実との関わりからそこに政治的世界をみるというものである。

広嗣の乱以後の不安定な時代に万葉集に残された宴の場での歌は、単に心情の吐露の方法や風流なものとしてではなく、政治的世界との結びつきを無視することができないといってもよいであろう。都という空間で、政治が動く中、政治に関わる物たちはまた、宴という場での歌によって結びつけられる空間を持つことになる。こうした都の宴での歌はそこに集結している人々にとって、どのような意味があるの

だろうか。歴史的背景を踏まえた上で、藤原氏の台頭により、政治的な環境が大きく変動していく奈良朝後期を生きた家持の歌につて、彼をとりまく人々との歌の関わりから考えていきたい。

一

政治がまさに近くで生々しく動いていこうとしている都において、家持は、二十一才。内舎人という立場の時に次のような宴に参加している。

橘朝臣奈良麻呂の集宴を結べる歌十一首(天平十年)

手折らずて散りなば惜しと我が思ひし秋の黄葉をかざしつるかも

めづらしき人に見せむともみち葉を手折りそ我が来し雨の降らくに

奈良麻呂

もみち葉を散らすしぐれに濡れて来て君が黄葉をかざしつるかも

久米女王

めづらしと我が思ふ君は秋山の初もみち葉に似てこそありけれ

長忌寸娘

奈良山の峰のみち葉取れば散るしぐれの雨し間なく降るらし

県犬養吉男

もみち葉を散らまく惜しみ手折り来て今夜かざしつ何をか思はむ

県犬養持男

あしひきの山のもみち葉今夜もか浮かび行くらむ山川の瀬に

大伴書持

奈良山をにほはす黄葉手折り来て今夜かざしつ散らば散るとも

三手代人名

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は散るとも

秦許遍麻呂

十月のしぐれにあへるもみち葉の吹かば散りなむ風のまにまに

大伴池主

もみち葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか

大伴家持

以前は冬十月十七日に右大臣橘卿の旧宅に集ひて宴飲せり。

八一―一五八一―九一

卷八の雑歌の部分に収められているこれらの歌の中で家持は最後に名を連ねる。この同席者は久米女王・長忌寸娘・県犬養宿称吉男・県犬養宿称持男・大伴書持・三手代人名・秦許遍麻呂・池主である。このメンバーを詳しく見ていこう。このうち、三手代人名・秦許遍麻呂については詳細は未詳であるが、吉男^{（註）}、持男の県犬養宿称^{（註）}というのは橘三千代となった諸兄の母方の家である。書持は家持の弟。池主は同族であり、家持が越中守となった時に越中掾であり、頻繁に贈答を交わし合った相手である。さらに池主は後年の橘奈良麻呂の変では投獄されることになる。諸兄はこの年に右大臣となっており、息子の奈良麻呂はこの時十七、八年と考えられ、家持と同世代の若者であろう。宴には久米女王、長忌寸娘^{（註）}という女性もみることができ、なかでも、久米女王はこの宴の主賓と考えられる。こうしたメンバーは諸兄

を中心としたものであり、すでに、歌を歌う場を同じくするメンバーとして諸兄親子と大伴の一族がいることがあきらかである。

こうしたメンバーで宴は進んでいく。まず主人としての奈良麻呂が「散りなば惜し」と思っていた黄葉をこうして今日、「かざ」せたといい、出席者とともに「黄葉」をめめることができる喜びを歌う。それに続いてさらに、「めづらしき人」といい、逢いたかったという意味をこめて、雨にもかかわらず黄葉を折ってきたと、主人として歓迎の意味をこめて今日の宴のテーマを歌うのである。主人の挨拶に続いて久米女王は、「君が黄葉をかざしつるかも」と好意に対する謝辞を主人の表現をそのまま使うことで示している。次の歌は黄葉を通しての君への讚美となっていく。主人、主賓の歌の後、出席者の歌は、テーマである「黄葉」を歌いつつ、宴の空間への充足、宴の外へと広がる空間への歌、そして、この宴がそのまま続いて欲しいという家持の「明けずもあらぬか」という歌で結ばれている。すでに論じられているように、これらの歌は、「黄葉」をテーマとして歌われ、主人の挨拶、招かれた側からの主人への挨拶と型どおりに続いていき、その後、テーマである「黄葉」が視点を変えて歌われていく。「黄葉」を賞で、この空間のすばらしさを歌った後は最後の家持の歌により、この場、空間をともししているものたちの時間、空間の永続を願って歌い納めとなる。これら、十一首の歌すべてに「黄葉」が歌いこまれていくように、実体としての「黄葉」の存在の有無はおいて、この宴は「黄葉」を歌うことによって、共通の背景を得ようとしていることはまちがいが無いであろう。

その時、ともに過ごすこの宴の空間がつづくことの願い、「思うどち」という集うメンバーの結びつきを強調していることに注目すべきである。こうした表現は宴の歌としては、型どおりのものであることは、明らかである。しかし、そういった表現しかなかったというのではなく、そこにいるメンバーの中で、型どおりの表現をしたとい

うことこそ宴の歌では、考えるべき問題であろう。宴の初めに打ち出されたように季節の風物を歌うことは、風流な宴である場合の前提ではあろうが、単に風流な宴が諸兄を中心となされたというのみでなく、表現された歌世界さらには、主人、客、季節のテーマという宴席歌の型がこうしたメンバーの間でなされていったということが重要である。すなわち、それは、歌うことの連帯感を持ち、歌の表現について、同じ理解をしめしていることに他ならない。歌の表現に新しいものを求めるのではなく、そこにいるメンバーとの間で歌を季節の風物によって表現してみせることで確かめ合うといってもよいであろう。あえて、型どおりであることの必要があるのではないだろうか。家持にとつてのこうした宴での歌のあり方は、その後どのようなものだろうか、時代を追ってみていきたい。

二

聖武天皇は天平十二年(七四〇)の広嗣の乱以降、都を平城から久邇、さらには、難波、紫香楽へと移していく。都がもとの平城に戻ったのは天平十七年(七四五)であるが、平城にもどつてからさらに激しくなっていく。天平二十年(七四八)四月には藤原氏とは一線を画し、諸兄の頼みの綱であった元正上皇が崩じる。さらに翌年に聖武は娘の皇太子阿部内親王に譲位し、孝謙天皇が誕生する。そして、自身は上皇となつて仏教へと傾いていくのである。聖武が譲位した後、孝謙の背後には、母、光明子に係する機関としての紫微中台ができるが、この長官となるのは光明子の異母兄、反諸兄派の急先鋒である仲麻呂であった。この紫微中台は、皇太后の機関を大きく越えて、次第に政治の実権を握っていく。

こういった大きな動きの中で、反藤原勢力と手を結んでいた大伴の氏の上である家持は、天平十八年(七四六)には越中守となつて都を

離れており、越中での家持は都に動きに神経を使いつつ、都の宴のメンバーからははざれるのである。五年後の天平勝宝三年(七五〇)に越中から戻るまで、家持には、都の歌の場はなく、限られた歌の世界をもつのみとなる。すなわち、それは、越中という「遠の朝廷」での、歌の場、彼にとつては「鄙」であり、都からは隔絶したものであった。この越中でも家持は盛んに宴を設け歌を残しているが、そこに集うのは、池主をはじめとする越中の役人であり、そこでの歌は、「越中」という限られた空間におくことになる。たとえば次のような宴の歌を例としてみる事ができる。家持が越中へ行って初めての宴での歌群とされている。

八月の七日の夜に、守大伴宿称家持が館に集ひて宴する歌

秋の田の穂向き見がてり我が背子がふさ手折りけるをみなへしかも
守 家持

をみなへし咲きたる野辺を行き廻り君を思ひ出たもとほり来ぬ
秋の夜は暁寒し白栲の妹が衣手着むよしもがも

ほととぎす鳴きて過ぎにし岡びから秋風吹きぬよしもあらなくに
掾 池主

今朝の朝明秋風寒し遠つ人雁が来鳴かむ時近みかも
天離る鄙に月経ぬ然れども結ひてし紐を解きも開けなくに

天離る鄙にある我をうたがたも紐解き放けて思ほすらめや
池主 家持

家にして結うひてし紐を解き放けず思ふ心を誰か知らむも

ひぐらしの鳴きぬる時はをみなへし咲きたる野辺を行きつつ見べし
家持

大目 秦忌寸八千鳥

妹が家に伊久里の杜の藤の花今来む春も常かくし見む

僧玄勝

雁がねは使に來むと騒くらむ秋風寒みその川の上に

馬並めていざ打ち行かな洪谿の清き磯みに寄する波見に

守 家持

ぬばたまの夜は更けぬらし玉櫛笥二上山に月かたぶきぬ

史生 土師道良

十七—三九四三—五五

まずはじめの家持の歌は、「我が背子」とよばれる客の持つてきた「をみなへし」を歌うことで挨拶の意味をこめる。女の立場で歌うことによつて、相手の来ることへの期待が強く表現されているがその相手の行為が「秋の田の穂向き見がてり」であることに注目したい。家持は、守としての立場で越中の地で歌っているのであり、この新しい土地を強く意識していることになる。次はかつて都でもに宴で歌った池主が今は、掾という立場で着任しているが、彼は女の立場から歌う。

家持が使った「をみなへし」を使いつつ、池主は、それをまわりの景とし、野辺で相手を思い出す物としている。ここでは、野辺にあるおみなへしということ、家持のように、場に即したのではなく、都風の表現とするが、それはあえて、家持の使った言葉をもとの景と重ねてみせることにより、越中の景と都の景を重ねる意図がみられるのではないだろうか。こうした歌い出しのあと池主は、次の歌では、「妹が衣手」として都で待つ女性を歌うことで、再びこの空間に都ではないという現実の位置を与えていく。さらに三首目では、秋風の寒さから、独り寝のわびしさへとつなげ、旅先という場をつくりあげていくのである。

見たように、池主の歌は、都と鄙、両方の思いを歌う。この歌により、その場において、彼らのなかには都と鄙との意識が強くもたれた

ものにほかならないが、家持は、その後、旅寝の寒さとした「秋風」から季節をとらえようとする。しかし、この季節観は、その場の越中のものではあつても、歌にされて理解される時、秋風の次には遠くからやってくる雁というように宴の場の人々にとっては、都で培われた秋から冬への移り変わりの表現としてあることにほかならない。こうした都と重ねた景を歌いつつも、家持は次の歌では、「天離る鄙」と越中を位置づけそこでの思いへと結んでいく。これは、池主の歌への理解であり、彼らにとつてのこの場が都を思いつつ、そこからは離れているという共通の理解へとなっているのである。こうした都と鄙との歌は、池主からの都の妻に対して歌う歌へと続き、家持の三九五〇の歌の「誰か知るらむ」という言葉によつて、その場の人々の空間的なつながりを強くしたものと成ろう。こうしたつながりがこそが、鄙というべき場に身をおいた都人の宴であり、歌によつてつながっていく共通認識、さらには、信頼感ではなかったのだろうか。

しかしながら、この宴は、更に歌われていく。家持のあとには、大目による古歌の披露となるが、ここでは、冒頭に歌われた「をみなへし」を受けて、都と鄙の思いから、今の場、越中そのものの地へとむけたものである。「ひぐらし」こそは、もう去つていった「ほととぎす」でもなく、これからの寒さを感じさせる「雁」でもなく、今の鳥にほかならない。ここでは、歌の表現の上の自然ではなく、目の前の自然を歌世界に取り込み、今の場における共通の感覚を持つとうとしているのである。また、続いて歌うのは僧の玄勝であるが、この歌も古歌である。ここでは「妹が家に伊久里の杜」といい、越中の地名の中でも、恋歌的に要素をもつものを出している。これは、たとえ、表現が都のものと同じであつても、地名をだすことで限定し、より越中という空間での宴を意識しているものである。古歌二首によつて越中という場へもどされた宴は、このあと、越中の景とともに歌の景としてとらえて理解することによつて結ばれていく。こうした歌いかた

こそが、家持が鄙としての越中で身をおいた歌世界ではなかったのだろうか。すなわち、それは、都での歌の世界を背景として持ちつつも、現実の鄙の景を歌に取り込んで行くことよってのみえられる都人たちの共通表現だったのである。言い換えれば政治の中心、都から離れた人々の空間ともいえよう。そこでは、鄙を意識として持つことよって都という空間と結びついていたのである。

三

こうして、都の意識を共有しつつ、越中という鄙の地にいる者たちの宴の歌の中で特殊なものをみることが出来る。まずはじめに、「天平二十年春三月二十三日に、左大臣橘家の使者造酒司令史田辺福麻呂に守大伴宿称家持が館に饗す。ここに新しき歌を作り、併せて便ち古詠を誦み、各々心緒を述べ」という題詞のつくものからみていきたい。

奈呉の海に舟しまし貸せ沖に出て波立ち来やと見て帰り来む

波立てば奈呉の浦廻に寄る貝の間なき恋にそ年は経にける

奈呉の海に潮のはや干ばあさりしに出でむと鶴は今そ鳴くなる

ほととぎす厭ふ時なしあやめぐさ鬢にせむ日こゆ鳴き渡れ

十八—四〇三二—三五

諸兄の使いとして、都からはるばるおとずれた田辺福麻呂（註）に対して、家持が歓迎の宴を設けたおりの歌で、まず福麻呂が四首歌う。都からはなれ、「遠の朝廷」に身をおく家持にとつて、都にいた時に頼みとしていた諸兄からの使者である。この宴には、それまでのものと異なり、都の空間の再生する意図があるはずであろう。福麻呂の歌は越中の景勝地である「奈呉の海」をうたい、この地での歓迎に対する挨拶をするが、この四首の最後の歌は、巻十に一九五五として重出し

ている。巻十では夏の雑歌とされているこの歌は、越中での宴の三月二十三日には、少し季節が早いと言わねばならない。福麻呂は前の歌で今日にしている鶴を歌うが、やがて、ここを去っていく自分と次の季節の鳥であるほととぎすを重ねて、ほととぎすが家持のためにずっと鳴き続けて、とりわけ、あやめぐさを鬢にする五月五日には必ずやってきてくれと歌う。この古歌の引用は、あえて、都の歌を歌うことで、家持に都との心理的距離を縮めようとするものと考えられよう。この歓迎の宴はさらに続き、景勝地である「布勢の水海」へと場を移し、宴の歌が残されていく。福麻呂は、その後も家持たちのしたてた遊覧の場で歌を残すが、掾の久米広繩の館での宴の後に次のような歌を残している。それは「太上皇の、難波宮に御在しし時の歌七首」という題をもつものである。歌をみていこう。

堀江には玉敷かましを大君を御船漕がむとかねて知りせば

玉敷かず君が悔いて言ふ堀江には玉敷き満てて継ぎて通はむ

右二首。件の歌は、御船の江を浜りて遊宴せし日、左大臣の奏せ

しものと御製なり。

橋のとをの橋八つ代にも我は忘れじこの橋を

橋の下照る庭に殿建てて酒みづきいます我が大君かも

月待ちて家には行かむ我が挿せるあから橋影に見えつつ

右の件の歌は、左大臣橘卿の宅に在りて肆宴したまひしときの御

歌と奏歌なり。

堀江より水脈引きしつ御船さす賤男の伴は川の瀬申せ
夏の夜は道たづたづし船に乗り川の瀬ごとに棹さし上れ
右の件の歌は、御船の、綱手を以て江を浜りて遊宴せし日に作りしものなり。伝へ誦みし人は田辺福麻呂これなり。

十八―四〇五六―六二

これらの歌は、福麻呂が帰京する前日の二十六日に披露されたものと思われるが、福麻呂は、越中の宴において、太上皇である元正と諸兄関係の三種類の歌を披露している。初めの二首は、元正が難波の堀江に船を出したときに元正と諸兄が歌ったもの。次の三首は諸兄の宅で肆宴をした時のもの、最後の三首は川で船に乗って遊宴した時のものという。『続日本紀』によれば、天平十六年(七四四)一月十一日から十四日まで、左大臣であった諸兄と元正上皇は、難波宮に滞在している。家持は越中赴任以前ではあるが、こうして福麻呂が伝えたということは、これらの歌の存在を知らなかったという可能性がある。福麻呂の伝える一組目の歌は元正を接待する諸兄とそれに和すものである。諸兄の歌は門部王の「あらかじめ君来まさむと知らませば門に宿にも珠敷かましを」(六一―一〇二三)という類想歌をもつ。これは、天平九年に門部王の家での宴のものであるがこれには中心メンバーとして諸兄の弟橘佐為が参加している。さらに諸兄自身の歌でも後の天平勝宝四年(七五二)に諸兄邸で聖武を迎えた宴の場で類想歌として、次のように歌う。

葎はふ餞しき屋戸も大君の坐さむと知らば珠敷かましを

十九―四二七〇

これらの歌のうち門部王のものは、佐為を通して諸兄が知った可能性があるが、後にも類想歌を歌う時、これらの表現の来訪の喜びは、訪れたものとの結びつきの強さとして諸兄に持ち続けられた歌表現であろう。二組目は元正が来賓として挨拶する歌であるが、そこで橘の木を讃えることで、諸兄を讃えるということになっている。河内女王は宴に興じる元正を歌い、粟田女王は橘の美しさ、宴のすばらしさを歌う。この三人からは、元正をとりまく女性の歌のありかたが考えられるこ

とはすでに述べたが、こうした、女性を伴つての来訪は、諸兄との信頼感、さらには、歌を介して、同じ世界を有するということができたことを意味していよう。

三組目は、作者を明らかにしていないが、難波での船による宴の様子を歌うものである。こうした三組の歌は、難波における、諸兄と元正との関係の深さを表現したものに他ならない。この年は、聖武が元正、諸兄二人を残して紫香樂宮へいくなど、元正、聖武との関係の微妙さが明らかになりつつある時であるが、こうした時に元正と諸兄とは歌の世界では共通の場をもっていたこと福麻呂によって伝えられる。そして、家持はこれらの歌のうち「橘」の歌に家持は追和して次のように歌う。

常世物この橘のいや照りにわご大君は今も見るごと

大君は常磐にまさむ橘の殿の橘ひた照りにして

十八―四〇六三・四

家持は、福麻呂が都から持ってきた歌に「追和」したという。つまり、時間、時を隔てた歌が、ここでは再生され、その空間を得た家持が答えたということになる。歌は「大君は今も見るごと」と「大君は常磐にまさむ」と言う言葉により皇統の讚美、ならびに二首ともに歌われる「橘」の変わらない「照り」によつての橘家への讚美である。

直木孝次郎氏は、田辺福麻呂が諸兄の使いとして越中へとやってきたのは、これらの歌を家持に伝えるためであったとする。それは、諸兄が頼みとしていた元正がこの時、病床につき、苦境に立つ諸兄が「名門大伴氏の嫡流で、かつ諸兄の立場や元正太上皇との関係をよく理解していた」家持との関係を「緊密にしておく必要」を感じたためとされる。確かに直木氏の論じるように、都を離れた家持にとつて、都の歌の場は歌そのものだけでなく、歌の背景を共有する人々との、そ

の共有する世界の確認の意味もあつたにほかならない。越中での家持にとつて都からの物理的に距離をなきものにする福麻呂との歌の共通の空間は、単に歌という表現をすることのみではなく、歌をおしてその背後にある都での政治的姿勢の共有もあつたといえよう。鄙という場で共通の歌世界をもつていた家持は、今、歌によつて鄙と奈良を結びつけることができたのであつた。鄙に身をおく家持にとつて都の歌世界の再生ということとは、自らの歌の世界の広がりとともに、今、共有している鄙の都人との世界における「都」の確認という意味もあつたのではないだろうか。

四

都での空白な時を経て家持は天平勝宝三年(七五〇)年に少納言となつて帰京する。「歌」でかろうじて結ばれていた都との関係はどうなつていくのだろうか。都での歌をみていこう。越中から帰京した家持は、政治の中心に戻つた大伴の氏の上という立場の意味が強くなつてくるものとなるが、その家持にとつての歌は宴席でのものが多くなつてくる。

まずは天平勝宝三年に、都にもどつてすぐに参加したものからみていきたい。

十月の二十二日に、左大弁紀飯麻呂朝臣の家にして宴する歌三首

手束弓手に取り持ちて朝獵に君は立たしぬ棚倉の野に

右の一首は、治部卿船王伝誦す。久邇の京都の時の歌。

明日香川門を清み後れ居て恋ふれば都いや遠そきぬ

右の一首は左中弁中臣朝臣清麻呂伝誦す。古京の時の歌なり。

十月しぐれの常か我が背子がやどの黄葉散りぬべく見ゆ

右の一首は、少納言大伴宿称家持、時に当たりて梨の黄葉をみてこの歌を作る。

十九―四二五七―九

家持が越中から帰京後はじめての集宴歌。五年にわたり都の政治に身をおくことのできなかつた家持を迎えての宴である。船王は舍人皇子の子。後に仲麻呂の乱に連座。中臣清麻呂は池主とともに翌年、高田の野に上り、所心を述べた歌の場にもおり、また、後に宴を主催し、家持関係の人々があつまる折に同席している。このメンバーを見る限り、主催者の紀飯麻呂、船王といった、後に仲麻呂の一派に加わる者もあり、かならずしも、最終的に政治姿勢がおなじであるとはいえないが、そういった人々が、ここに集まっているということは、この時点での、それぞれの年齢、さらには置かれていた立場から、いまだ政治的姿勢をあきらかにしていないということも考えられよう。さらに、家持は、都にもどつたばかりであり、越中在任中は、みてきたように、都の情報が十分だとはいきれない。家持にとっては、越中へ赴任する前と、現時点つまり、家持の都での空白期に、大きく政治状況が変化しているため、情報が少ない家持自身には、身を置く場での位置がとらえきれないということも想像に難くない。そう考へる限り、後にたもとをわかつ人と同席していたのは、そこには、政治的色彩あいはなく風雅が目的であつたとばかりはいえないであろう。歌は二首までが「伝誦」である。初めのもは「久邇京」の時のものであり、作者はあきらかではないものの、歌には「手束弓」をしつかりと持ち獵の場に立つ「君」がうたわれている。都の場所から、この「君」は聖武であることに間違いはないであろう。久邇京へは、家持も行つており、その時代をとにも思い出し、中心にいるべき聖武の姿を互いに理解しあつていえるであろう。二首目は、明日香の古京をうたつたものであり、「古京」という点からのつながりとされ

ているが、ここで、あえて、「古京」を持ち出してゐるのは、ここにいるメンバーにとつて、今は「古京」となつてしまつた土地に対する共通の思いをとらえあうということがあつたのではないだろうか。越中から平城に戻つた家持の前には、平城が都としてあるが、それはかつて、家持が都を出る前、聖武とともに移動した後の都であり、かつてと同じものではないのである。聖武とともにあつた「古京」そして、その時代を今、都にもどつた家持に再びよびおこすものとなつていよう。これは、その場にいるメンバーの共通の理解に他ならない。こうした歌を受けて、家持は今、眼前の主人の庭の黄葉を歌うことで、時間をもどし、前の歌からここまで、たとえ距離の隔たりはあつたとしても、このメンバーには同じ思いがあることを確認する意味があつたのではないだろうか。家持が越中からもどつてすぐの宴において、こうして、久邇京がうたわれていることは重要であろう。

次に、都に戻つた翌年、天平勝宝四年になされた奈良麻呂の饞別の宴の歌をみていこう。

二十七日に林王が宅にして、但馬按察使橋奈良麻呂に饞する宴の歌三首

能登川の後には逢はむしましくも別るといへば悲しくもあるか

右の一首は、治部卿船王

立ち別れ君がいまさば磯城島の人は我じく齋ひて待たむ

右の一首は、右京少進大伴宿称黒麻呂

白雪の降り敷く山を越え行かむ君をそもとな息の緒に思ふ

左大臣、尾を換えて云はく、「息の緒にする」といふ。然れども

猶し諭して曰く、「前の如くこれを誦め」といふ。

右の一首は少納言大伴宿称家持

十九―四二七九―八一

『続日本紀』天平勝宝四年十一月三日の条に「参議従四位上橋朝臣奈良麻呂を以て、但馬・因幡の按察使とし、兼ねて伯耆・出雲・石見等の国の非違の事を檢校せしむ」という記事をみることで、諸兄の息子奈良麻呂はこの時三十二才。この宴のメンバーのうち、主催者の林王は未詳であるが、船王は舍人皇子の子で、後の淳仁天皇の兄、家持が越中から帰京後の宴にも同席している。

一首目は、「後には逢はむ」と恋歌の形式をとり、旅立つ奈良麻呂への思いの深さを歌う。さらに二首目も同様に恋歌において、旅立つ男を待つ女が無事に帰ることを祈るために「齋ふ」とする表現を使い奈良麻呂が無事に帰ってくることを歌う。最後の家持の歌は「息の緒に思う」といい、諸兄の息子である奈良麻呂に対して今後のことを期待する表現となつて、旅立つ奈良麻呂を送る宴の共通の思いは結ばれたと言える。左注にはこの家持の歌の第五句について、諸兄が「息の緒にする」と改めたがやはり「前の如く誦め」としたとある。こうした発言は諸兄が歌は残してはいないものの、息子である奈良麻呂の宴に同席し、そこでの歌のあり方を判断すべく立場であつたといえよう。この宴において、ふさわしい歌い終わりはどのようなものが諸兄によつて決断される。それは、宴における歌というものは、単に一人の個人のものではなく、全体の中であるべく表現をもとめられていたことを知りうる例となろう。

こうして都に戻つて後の家持の歌は、まず、宴席にその場をもとめることとなる。家持は都での空白の時間を超え、都での政治に関わる者として、歌の場では、諸兄とともに文化圏をつくりあげていくといえよう。彼をとりまく政治状況の中で家持は大伴の氏の上としてこうして歌い続けるのであつた。

おわりに

都に戻ってからの家持は諸兄と歌の同じ文化圏をもつこととなる。そこで歌われる歌は、歌の内容は必ずしも政治的な要素がなくとも同じ方向性を持つものたちの共通のものとなる。歌によって結ばれる彼らにとって、歌の中で風雅を志向しても、その風雅は彼らの共有する、彼らの文化圏というフィルターを通じたものであることはいままでもない。歌うこと、それは、一人の個人として個の感性を打ち出すのではなく、同じ時代、都にあつて、同じ意図で政治に関わる者たちの意識の確認であり歌の世界とは彼らの共通背景でもあつた。「歌人」として実体を超えるのではなく、実世界を動かす彼らが作つた歌の中に実体を超えた世界があつたといふべきなのである。

注

- ①天平十二年の広嗣の乱以降、聖武は伊勢、伊賀、美濃、近江に巡幸後久邇京に至るが、その後も紫香樂宮造宮、難波遷都を経て再び平城京に戻るのは五年後、天平十六年であつた。
- ②光明子の産んだ皇子、基王のなきあと、この二人の立太子にむけての対立は激しさを増すが天平五年に諸兄の母である橘三千代が薨去した後、安積皇子の後見は弱体化し、天平十年、光明子との間の唯一の子であつた安倍内親王が立太子する。
- ③『続日本紀』では、天平十六年一月十一日に「この日、安積皇子、脚の病によりて桜井頓宮より還る」とあり、二日後「薨しぬ。時に年十七」と記される。
- ④木本好信氏「政争と陰謀の万葉人―天平万葉の政治的世界」『天平万葉論』に詳しい。
- ⑤吉男は『続日本紀』に天平勝宝二年六月に但馬掾正六位としてでて

くるがその後四年には大仏開眼に玄番助として引道奉仕、さらに宝字三年には肥前守、八年に伊予介となつている。

- ⑥集中この歌を一首のこすだけで、久米女王に歌をもつて仕えたと考えられる。

- ⑦家持が都を旅立つたのは七月七日。その一月後にあたる。

- ⑧伊藤博氏はこの歌について家持の歌が女の立場であるのにこれも女の立場をとるのは「わざとずら」したものでそれは「応答の作法であり、相手への信頼と親愛の情をかえって深く告げることになる」とされる。『万葉集釈注』三九四四の注。

- ⑨この歌には「古歌一首年月審にあらず。ただし聞きし時のまにまに、ここに記載す」とある。伊藤博氏はこの歌の「をみなへし」には越中の女の意が託されており、「故郷の人は人で天さがる越の国の女性も見捨てたものではないという心」を歌い、歌の流れを変えているとされる。注⑧に同じ、三九五一の注

- ⑩この歌には「伝誦するは」という言葉がつく。

- ⑪田辺福麻呂は歌集が万葉集中に記されるが、そのうち、巻六の一〇四七以降は諸兄のもとで作歌した形跡があるという説もある『講談社文庫版万葉集』四〇三二の脚注。

- ⑫これは題詞にいう「古詠を誦み」にあたると考えられる。

- ⑬「九年丁丑の春四月に、橘少卿と諸大夫等との、彈正門部王の家に集して宴せる歌二首」とありこの日の歌としては橘文成のものがあつるが櫻井王が「後に追ひて和した歌一首」としてその日の二首の次にならべられている。

- ⑭「共有される心」『別府大学紀要』第四十四号

- ⑮左註には福麻呂が「伝誦」したとあるが、これについて伊藤博氏は「諸兄の立場に立ちつつ、誦詠者福麻呂自身の作つた作であるがゆえに、署名がない」とされる。注⑧に同じ四〇六一・二の注。

- ⑯「心を通わせる元正太上天皇と橘諸兄―光明皇后と藤原氏を相手

に」『万葉集と古代史』

⑰このメンバーを安積皇子、橘諸兄につながる古くからの親交同士とみる説もある。吉村誠氏「紀飯麻呂家宴歌三首―宴席歌の主題―」『上代文学』四十七号